

一般助成(日本国内各地の災害被災者の支援や災害地復興のための支援)

「仙台市若林区沿岸地域における農業・農村コミュニティ再生」事業

復興がほぼ完了した若林区沿岸部の地域おこしを農業面とコミュニティ面から支援する活動

津波で被災した農地を復旧させ、大規模化・法人化しただけでは農業を再生することはできない。後継者不足を解消し、地元の農業を活かし、被災地の復興と持続可能な農村づくりを目指している。仙台市若林区沿岸部で大学生が中心となって発足した団体が、地域住民と一緒に真の復興につながる地域おこしに取り組んでいる。



ReRootsファームの運営、野菜販売、せんだいわらアート製作を中心に活動



大震災の津波によって甚大な被害を受けた仙台市沿岸部で農業と地域の再生に尽力

一般社団法人「ReRoots」は、2011年3月11日に起きた東日本大震災で、仙台市青葉区川内コミュニティセンターに避難した学生や地域住民が集まってできたサークルを前身とする団体で、現在は仙台市にある各大学に通学する大学生を中心として、大震災で被災した仙台市若林区の沿岸部を拠点に活動している。田園地帯を飲み込む津波の映像をご記憶の方も多いと思うが、当該エリアは津波による甚大な被害を受け、農業そのものや農村文化が衰退していった。そこで同法人では「復旧から復興へ、そして地域おこしへ」をコンセプトに、農業と農村コミュニティの再生を支援するとともに、津波で被災した農地の復旧だけでなく、農業を安定して継続できる復興、さらには農

業を活性化させ、住民が主体的に地域の発展を担いながら地域おこしができる段階まで支援していくことを目的に活動を続けている。

若林区沿岸部では東日本大震災から営農再開を果たしているが、後継者不足が顕著になっている。さらに、行政が農業の大規模化・法人化を一気に推し進めた影響により、そのマネジメントが大きな課題となっている。それがうまくいかなければ、仮に若者が来ても定着せず、20年、30年後の農業や農村の未来を描くことができない。そこで同法人では地域ぐるみで若手農家の定着を目指す「農村塾」の仕組みを創造することで、今後、全国の農村が直面することになるであろう問題の解決を図りながら、全国のモデルとなるような取り組みを行っていきたく考えている。

野菜作り、野菜販売、稲わらアートで若者を引きつけ、地域に賑わいを

同法人では上記のような課題に対処するため、ReRootsファームの運営、野菜販売、せんだいわらアートの3本を柱に据えて活動している。

ReRootsファームは、震災後に遊休地となった農地を借り、農家から指導を受けながら野菜作りに取り組むことで若者の農業への関心を引き出すことを目的に行われているが、4～9月に春夏野菜(トマト、オクラ、ほうれん草、落花生、里芋、枝豆)、8～12月に秋冬野菜(ほうれん草、春菊、ブロッコリー、青梗菜、大根)を生産し、育てた野菜は八百屋などで販売した。

野菜販売は被災農家の野菜を販売することで農家の販路づくりを行うもので、8軒の農家から卸していただいた野菜を4～3月の毎週土曜に荒町地区で販売した。また、

コロナ禍の影響で回数は減ったが、10月、11月には市民発表会や福祉施設での出張販売も行った。

せんだいわらアートは地域の伝統的な稲わら文化の発信と継承を目指すもので、被災した田んぼの稲わらを活用して、5m程度の巨大オブジェを制作・展示した。8～9月にかけて毎日3～4名の学生ボランティアが制作に取り組み、9～12月の展示期間には約65,000人の来場者があった。

「今回の事業においては、コロナ禍による出張販売の減少と、わらアートのオープニングイベントの縮小を除いて、当初の想定通りに実施することができました。加えて、『農村塾』づくりの意見交換を実現することができました。今後は『農村塾』のプログラムの具体化、住民の生きがいづくりのサロンの実施などに取り組んでいきたいと考えています」と、同法人では事業の手応えと今後の抱負について語ってくれた。



被災した田んぼの稲わらを使った巨大オブジェを制作・展示



助成団体:一般財団法人 ReRoots

<https://reroots.nomaki.jp>



この度は私たちの活動に助成していただき、心から感謝申し上げます

震災から10年以上が経過し、震災の記憶を伝承することに世の中の大きな関心が向いているように感じています。ただ、仙台市若林区沿岸部においては、これからは地域課題を解決する正念場であるのが実情であり、POSCのように幅広く、社会貢献活動への支援を掲げておられる団体の重要性をひしひしと感じております。これからも何卒、よろしく願いいたします。

一般財団法人 ReRoots
代表理事 二木 洸行さん